

セビーリヤ・ハポンの蟻ジゴク

英文学者・永川玲二・イダールゴ

大工原彌太郎

朝七時きつかりに電話が鳴って起こされ、いきなり「やあ、ひばらく御無沙汰。やのあはつての便で日本に帰る。空港から君の家に直行、居候ふるから」と永川玲二に言われば誰でも驚く。しかも呂律はまわっていない。でも、これ以上ないほど簡潔明瞭。全四〇音に一五秒とかからず、答えんて求めずに通話は切れた。さすが日本語の名手と感心するが、会話の短さも気になり、コールバックした。簡単な電話問診だけでもわかる脳梗塞が起きたばかりの状況だ。「帰るな、動くな」と念を押し、受話器を置いてすぐに玲二宅一〇〇メートル先の知人に電話し、夜中だがセビーリヤ大学病院への連行を頼んだ。救急車で起こされた当直医は「セビーリヤの酒飲んでや、こうなるんだ」と、せせら笑ったという。そのまま入院。翌々日に玲二は脱走し、追っ手を撒き撒き四日後に日本に帰ってきた。それから一年。正確には一ヶ月で彼は死んだ。何もかもを使い切つて。それ以来セビーリヤにはもう行く気も起きない。永川玲二のいないセビーリヤは、もうセビーリヤではないという感慨が、いつまでも去らない。それほどに永川玲二はセビーリヤではなく、「セビーリヤ」の風景だった。

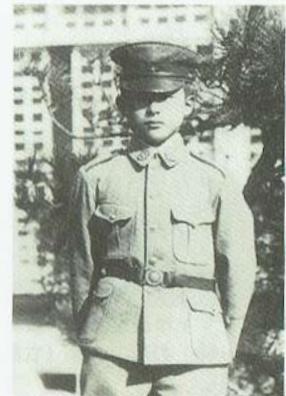
玲二に会いたければ、セビーリヤの空港でも駅でも、タクシー運転手に「カステイージャ・ディエシエス」と言うだけだ。地元の運転手なら、「おお！ エルチーノ！」の掛け声で走り出すだろう。途中で何も聞いてこない。でも訪問者はそのままであの不世出の英文学者永川玲二の家にたどり着ける。つぎに運転手が口を開くのは、車を止め、緑色の鉄の門扉を指差し、「ほら、あそこ」という時だけだ。門扉を開けて中に入れば、そこにいるたとえば立ち話中の人たち誰でもが、こちらは何も聞かずとも「あそこ、あそこ」と指を差す。その先の扉に Z. Reiji の貼り札があり、呼び鈴を押してしばらく待てば、「ゾア？」と、ア母音の語尾不明瞭な声がしてドアが開き、「いやあ、いらっしゃい」と破顔一笑の永川玲二が出迎える。初めての訪問者でも、空港で「カステイージャ16」と喋るたつた一言でここまで来られる。さすがにセビーリヤ在住三十年の実績と驚かずにはいられない。それほどに永川玲二はセビーリヤの街に、正確にはカステイージャ通りに溶け込んでいた。

ある時、試しに「もはや彼が往来を行き来する姿はこの街の風景だね」と何人かに言つてみた。どの店のおやじもおかみさんも、「まアな」と、渋々ではと疑えなくもない表情ながら、同意してはいたものだ。



セビーリヤ市指定景観保護住宅「カステイージャ16」の玲二の家（右側）（196頁の写真参照）

たしかに彼は、特に晩年の一〇年ほどは、地元の名士、といつよりも有名人だった。日本と違つて、スペインで、セビリヤで、セビーリヤ大学教授の彼の肩書きは一毫に値した



陸軍幼年学校時の永川玲二
(撮影年不詳)

ヒロシマで被爆した父上を満員の三等列車の硬い座席に横たえて郷里の米子まで搬送した少年期の記憶を語っていた。

父上の全身に広がるケロイドと、もはや虫の息ながら懸命に繰り出す呼吸で胸の膨らむたびに、まるで今も身肉が焼けているかのように血とも漿液ともつかぬ浸出液がジユクジユクと滲み出て焼け爛れた皮膚が新ジャガイモの皮のように剥けていく。八月で暑く、無性に腹立たしかったその思いが、今の自分の根底にあること……等を静かに語り、成人して大学を出、教壇に立ち、思うところあって職を去り、旅に出て、やがてスペインのこのセビーリヤが気に入つて住み着いた経緯から、日本文学・文化の特質までを手短に語っていた。なぜ『支那人』と呼ばれるのか？ は実に複雑……とも。

美男で評判の司会者がインタビューしたせいもあり、この番組放映が周囲のセビーリヤ人の玲二観を一変させた。たんに顔見知りだけだった人たちも、あの人は大変な人らしいと思い始め、ある地元紙は居住区・下町の地名をとつて「トリアーナの聖者」と見出しで紹介した。街なかで見知らぬ人から

挨拶されることが多くなつた。しかし玲二が一躍セビーリヤの人気者になつたのは、彼がテレビに出たという驚きからであつて、彼の生い立ちや知性を理解してという訳ではないらしかつた。それが証拠に彼の呼び名は依然として前と同様、「あの支那人」^{エキナチノ}としてだけ理解されたままだつたし、少しでも「中国にも原爆が落ちたのか！」と感心されていどで、それは彼が亡くなつた今になつても変わらない。セビーリヤ在住の中国人がどれほどの数かは知らないが、相当な数であるのは万人の認めるところ。その中にあって永川玲二ひとりがエル・チーノたる由縁は、画家の「あのギリシャ人」^{エギリシャノ}の例もあり、後世に永川玲二の足跡を辿る人がいれば興味深いことだろう。

ある年のセマナ・サンタ（聖週間）に、御馳走するからと僕の招待された夕食に彼も押し掛け同伴で行つた先の正真正銘の中國人家族みんなに「ああ、おまえがあのエルチーノ！」と感嘆され、「そう、そう」と平気で答え、握手とサインを求められる場面もあつた。

一般に永川玲二の名前は、セビーリヤのそれよりも英文学者としての認識が広く長い。花のニッパチリ一九二八年を中心二五年から三〇年生まれ近辺が蝋集した戦後もなくの東京大学文学部の学部・大学院に在籍した時の盛況を指すが、とりわけ同時期の仏文科渡辺一夫教室と並ぶ英文科中野好夫門下輩出の俊英は彼だけに留まらず枚挙指屈にいとまない状況は読書家にとつて周知のことだ。前でもなく後でもないその時期に産んでくれた親御さん方にどんなに感謝しても足りないだろう。その僕倖を充分に活用し、英文を軸足に同時期本当の意味の碩学俊英の多かつた露文仏文独文と彼はこそ縱横無尽に渡り歩いた。この時期に築いた豊かな人間関係と、お互い競い合つての修練が彼の一生を支える財産になる。しかし、彼の英文学畑の偉業についてはすでに公開資料にも明らかだから、

し、加えて一九九二年のセビーリヤ万博を前に地元テレビ局の制作したシリーズ物の教養特集「アンダルシアの『知性』たち」が永川玲二の巻を放映、そこで彼の書齋生活と哲学、生い立ちを語らせた。スペインでの男評価の基準からすれば、まったく風采もないあの小柄な東洋のおじさんが、じつはただならぬ存在であることを人々が認識したのはこの時からだ。彼はそのテレビ番組で、

私の語ることではない。

話はもどるが、そして、育つまでが長かったものの、永川玲二とアンダルシアの関係はこの時期に芽を吹いた。意外の感がしないでもないが、当初の彼は詩人として社会に出て、それはそれで人脈上の収穫になるあのマチネ・ボエティクの筵末を漬しあえする。卒業後の職がなかつたことも一因だが、小林秀雄さんのやつていた(実業から退かれて顧問だった)創元社に依頼され、当時の日本には彼の手元のそれしかなかつたロシア語訳本からの翻訳でロルカ訳詩集を出したのである。

時代を先取りした真っ黒な装丁がモダンだつたとは当時の担当編集者の証言である。しかし売れ行きはさっぱりだつたという。装丁だけでないロルカのモダンとダンディと、当時の敗戦の雰囲気もまだ濃厚な中での暗いのにデカダンでないロルカの雰囲気は、アメリカを追うのに懸命な社会状況に受けなかつたのではなかつたか。精密な調査はしていないが、とにかくこれが永川玲二の筆になる初出版であつたらしい。それにしても、はじめて社会性をもつた、つまり金を稼いだロシア語の能力は東大ではなく、終戦まで在籍した広島の陸軍幼年学校仕込みだつた。情報将校養成のロシア語特科での練成だというが、訳詩までこなすのはどうてい幼年学校のレベルではない。藍より出でて藍より青し、自らを磨いた恐るべき努力の結果だろう。

「玲二つて、アンダルシア人から見ると、どういう人間?」と、かつて玲二のセビーリヤ大学日本語科の生徒で後にEFEの在東京記者だつたアルベルト君に聞いたことがある。彼の答えは「まったくアンダルシア人。言うほどうまくいかないけど。で、アンダルシア人」だつた。意味を聞くと、「つまり、ダテおとこ?」になりたい、というか、格好つけ男、ブシは食わねど」

「長い表現だね。スペイン語では? ダンディの意味じやないよね」
[イグレゴ・ヒダゴ・トリアーナ]
[hidago de Torriana]

「高等っぽい男、か。サビオ(賢者)デ・トリアナといつた人もいたけど」

「たしかにサビオ。けれど、セビーリヤのサビオじゃない。下町トリアナの」

「女好きは?」

「玲二? それは、ない。というより、ある。けれど、うまくいかない。格好つけるから。でも、アンダルシアの女性、格好つけるの好き。玲二のことは別だけど」

「玲二? だつてアンダルシアの女性だけじゃなく、スペイン女性を嫌いだつた、『うるさい』って。彼女たちよく喋るからね。それで耳を塞ぐためにウオークマンを買っていったんだ」

しかし、玲二は非常な人好き客好きで、誰でもに居候させましたが、人もそうだと決め込んで、自分もまた居候や同居に平氣だつた。どちらにしろ彼につかまれば、彼から愛想尽きるまで離れない。

女性に優しい玲二はつとに知られている。そして、彼が大事にする女性は特別で、それゆえ高踏な文学論をぶちまくつていつもぶざまに終結する彼のプロボーズにどういうめぐり合わせでか、三度も居合わせた私の目には確かに彼はこれ以上ないイダールゴ。

でも、いま永川玲二は、トリアナの自宅裏の耳を塞ぐ必要もない静かなグアダルキビール河の底に眠つている。何より客好きだった彼には、自分を訪ねてくる旧友知友が気になつてゐるに違ひない。そこに居ない時には、もうひとつ散骨場所サンルーカルの浜辺で、性懲りもなく安ワイン飲みつつ、九州平戸に向かう大航海計画に花を咲かせているはずだ。

〔だいくばら・やたろう 団体役員〕